寄　稿

通潤橋と矢部の手永、石工と矢部の人々

東京大学名誉教授
篠 原 修

1. 時間が評価する不易の傑作

通潤橋を国宝にした文化審議会の答申、「近世水利施設の到達点を示す近世石橋の傑作」と言う言葉に示されるとおり、石造水路橋としての通潤橋は、上流の笹原川から白糸台地へ水を運ぼうとする計画、石橋として安全な高さで我慢し、サイホンを使った石質通水管を設計、維持管理を確実、容易にする漆喰接合と土砂を吐き出す放水など、近世の石橋としての完成度は類を見ない。

講演の先生方は言うまでもないと考えたのだろうが、形状としての完成度も極めて高い。筆者はコンクリートやメタルの橋を多く手がけてきたが、初めてこの橋を、前面にある水田越しに眺めた時にびっくりした。自分にはこういう綺麗なプロポーションを生み出せるだろうかと。構造と形状、両者の完成度が高いのだ。さらに言うと、嘉永7年（1854）の完成以来、今だに現役なのだから、長寿であるという意味からも時代を越えた完成度であると言えよう。真の傑作は時間が評価すると言う。

2. 石橋という範囲を越えて

審議会の答申や先生方の記述にしても、通潤橋が優れている点の議論は石橋という範疇でなされている。これは答申、議論として妥当だと考えるが、橋梁一般というより広い土俵で議論されたら、どうだっただろうかと考える。近世以前の猿橋のような木橋、近代になってからの鋼橋、コンクリート橋をも含めて議論するとどうなるか、という思いである。

関東大震災の復興橋梁として建設された隅田川の永代橋や清洲橋、明治末完成の日本橋などは、現役ながら重要文化財に指定されている。通潤橋は国宝とされているのだから、これらより格上だと評価されたと考えねばならない。勿論、筆者はそれが不満だと言いたいわけではない。片や重要文化財で此方は国宝だと言う、格の違いの理由がどこにあるのかがわからない。国宝とは重要文化財のうちでも特に優れて際立っているもの、とされている。通潤橋が特に際立っているのは、石橋グループの中では、を暗黙の了解事項にしているのだろうか。この辺りが、今一つ、すっきりしない。これは筆者のみの思いであろうか。

3. 庶民の、という評価軸

通潤橋に先立って、白糸台地の水路が重要文化的景観に選定されている。重要文化的景観の選定には当初から付き合っているから、従来とは違う基準については叩き込まれた。「我が国の生活、生業の理解に欠かせない景観」がそれで、従来の文化財のような貴重性や審美性が眼目とはなっていない。最も分かりやすい例を挙げれば、山間の棚田となる。そしてここがポイントなのだが、出来上がっている景観が重要なのではなく、その景観を生み出し、支えている人間の行為が評価の対象とされているのである。棚田の例で言えば、棚田を作り出し、それを支えている人間の活動が評価の対象とされているのである。確かにそれらの活動がやめば、棚田の景観は消滅してしまう。白糸台地の重要文化的景観でも、水路を支えている土地改良区の活動が評価されているのだ。

こういう文化財の評価だから、小生は重要文化的景観とは従来の仏像や寺院のような文化財とは違う、庶民の文化財なのだと理解した。従来の重要文化財や国宝は、典型例を挙げれば天皇や貴族、あるいは将軍などの上流階級が生み出した文化財であった。この事情は我が国に限られない、西欧、中国にも共通するものであったろう。繰り返していうと、この「庶民の」という点がキーポイントなのであった。白糸台地の水路は布田保之助以下の、熊本の藩主でもなく、ましてや徳川幕府の要人でもない、庶民階級の手永、石工が作り出したものであった。そして、その水路を今日に至るまで健全に維持、管理してきたのも土地改良区の庶民なのだった。

これを受けるような形で、通潤橋が重要文化財のレベルを一段抜けて国宝に指定されたのも、再びそれが庶民の作り出した石造水路橋であることを特に評価したものと考えざるを得ない。ここまで思い至れば、通潤橋が先に揚げた日本橋や帝都復興の永代橋、清洲橋などを押さえて、国宝に指定されたわけが判然とする。少なくとも筆者の心の中では。日本橋は帝大出身、アメリカ帰りの樺島正義の指導、復興橋梁群も帝大卒、鉄道省にいた田中豊が指揮、指導した橋だった。つまり、近代土木のエリートが生み出した橋梁であったのだ。文化庁の審議会委員が、今回、庶民性という点をどの程度まで重視していたか、それはわからない。しかし、結果からすると今回の国宝指定は、文化財行政のクリーンヒットだったといえよう。文化財をよそよそしいものでは無く、庶民の心に引きつけたのだったから。

4. 土地改良区の、観光の、町民の冷静さ

白糸台地と通潤橋を支えてきた、今も支える続ける人々の冷静な態度には感心することが多かった。典型例を紹介してみよう。筆者は白糸台地の下井手の整備から関わり始めた。上井手はすでに出来ていて、その状況を案内してもらって見て回ると、水路はコンクリートで固められていた。当たり前のことながら流速は早く、これでは生物が生息することはできないだろうと思われた。用水は田んぼに水を引けばそれでいいのかもしれないが、せっかくの水路に多様な生物が住めるようになれば、白糸

台地が生態系として豊かになりうる。可能なら当初がそうだったように、水路は土羽で、材料としては石と木材のみで整備すべきだと考えた。町の担当者に聞くと、工事は熊本県出先の農業関係課になるだろうと言う。委員会に来てもらって説明を受けると、そう言う土羽的な整備はできないと言うのだった。筆者は農水省が出している生物多様性の水路のパンフレットを見ていたので、可能でしょうと言うのだが、出来ないの一点張りなのだった。町と重要文化的景観を選定した文化庁担当者と、どうするかで議論を重ねた。半年に近かっただろうか。どこが水路整備の工事を担当してくれるかである。重要文化的景観の選定とそれに先立つ調査は文化庁の補助金で行われていた。「まさか」とびっくりしたのは、前例はありませんが工事にも補助金を出しましょうか、という文化庁の発言だった。これには本当に驚いた。文化庁は事業官庁ではないのだから。

しかし、びっくりが現実になった。自然材のみを使って河川や水路の整備をやってきた高知のコンサルタントが設計と工事監理を行うことになったのだった。お手本はドイツで始まった「近自然型工法」だった。びっくりしたのは、県の農水の頑なな態度と文化庁の柔軟さのみではなかった。本当に驚いたのは、通潤橋と水路の維持管理を行なってきた土地改良区の人達だった。すったもんだしたおかげで、水路の整備は大幅に遅れたのだが土地改良区のメンバーは文句も言わずに、近自然型工法への転換を良しとしてくれたのだった（陰では不満たらたらだったのかもしれないが）。また、近自然型工法は受け入れるとしても、長年にうちには泥がたまり、コンクリートで固めていない畦道は崩れてくるだろう。こういう維持管理の面倒くささは容易に想像できただろうが、それをも彼らは良しとしたのである。こうして近自然型の水路が出来上がってみると、のちに九州大学の鬼倉徳雄先生が嬉しそうに報告したように、貴重種のアブラボテという魚がひきつづき生息する水路となったのである。

驚いたのは土地改良区の人たちの我慢強さ、冷静だけではなかった。通潤橋がこれほどまでに有名になり、人気があるようになったのは土砂を橋梁の中央部から吐き出す放水が見事だったからである。写真に表されている通潤橋の姿は、必ずこの放水の時のシーンだった。これが売り物となって観光客を惹きつけていたので、いくばくかの金を出せば随時放水をやっていたのである。最盛期には年に800回を越えていたという。これでは通潤橋の将来が危ぶまれるという、危惧の声が出てきて当然である。通潤橋の水管や石垣の補修、保全に合わせて放水を今後どうするかが、議論されたらしい。らしいというのはこの辺りの議論に筆者は参加していないから。異論を唱えそうなのは、放水を売りにしている町の観光協会だろう、と考えた。放水をリクエストする際の金は橋の方に幾らかは回るにしても、最も恩恵を受けていたのは観光で食っている人々だった筈である。それが放水を日時を定めて、限定的にしたいとなれば、反対が出ても当然だろうと思っていた。開発と規制、観光と文化行政などのよく見られる対立である。それがなんと、委員会に出席していた観光協会の会長は、放水のやり方を変える事で結構ですと言い切ったのである。これにも驚いた。観光収入が減るであろうことは容易に想像できたはずなのである。山都町の文化程度、いや文化財認識は極めて高いのであった。

5. 通潤橋博物館を、あるいは水路橋の塾を

白糸台地は重要文化的景観に選定され、そこに水を供給する通潤橋は国宝に指定された。元々は対になって存在していた二つが再び文化財として統合されたのだと考える。ここまでは幕末から現在に続く、生きている文化遺産である。それはそれでめでたいが、ここで満足して立ち止まってはならない、と考える。通潤橋と台地の水路は過去からの現在へのプレゼントであった。貰いぱなしではまずい。これからの人々、山都町の未来へのプレゼントを考えるべきだと思う。二つの文化遺産を元に将来の文化財を生み出す人材を育てる義務があるのではないか、と考えた。

通潤橋をベースに石造橋梁を調査、研究する博物館ができないものだろうか。九州には石橋は山ほどもある。これらを対象に勉強する基地を山都町に作れないか。それが大袈裟だと考えるなら、より小ぶりな塾を発足させるべきではないか。どちらにしろ、九州の各地から、いや全国の大学、高専から若者が集って、いや石橋の本家ヨーロッパや中国からも。山都町がその震源地となることを夢見る。博物館にしろ塾にしろ、他にはないユニークなもの、それが今求めてられているのだ、と考える。

近自然型工法により整備した通潤用水下井手